

減劫と申すは人の心の内に候。貪・瞋・癡の三毒が次第に強盛になりもてゆくほどに、次第に人のいのちもつゞまり、せいもちいさくなりもてまかるなり。漢土・日本国は仏法已前には三皇・五帝・三聖等の外經をもて、民の心をとゞのへてよをば治めしほどに、次第に人の心はよきことははかなく、わるき事はかしこくなりしかば、外經の智あさきゆへに悪のふかき失をいましめがたし。外經をもつて世をさまらざりしゆへに、やうやく仏經をわたして世間ををさめしかば世をだやかなりき。此はひとへに仏教のかしこきによて、人民の心をくはしくあかせるなり。当時の外典と申すは、本の外經の心にはあらず。仏法のわたりし時は外經と仏經とあらそいしかども、やうやく外經まけて王と民と用ひざりしかば、外經のもの内經の所従となりて立ちあうことなくありしほどに、外經の人々内經の心をぬきて智慧をまし、外經に入れて候を、をろかなる王は外典のかしこきかともをもう。

又人の心やうやく善の智慧ははかなく、悪の智慧かしこくなりしかば、仏經の中にも小乘經の智慧世間ををさむるに、代をさまることなし。其の時大乘經をひろめて代ををさめしかば、すこし代をさまりぬ。其の後、大乘經の智慧及ばざりしかば、一乘經の智慧をとりいだして代ををさめしかば、すこししばらく代をさまりぬ。今の代は外經も、小乘經も、大乘經も、一乘法華經等も、かなわぬよとなれり。ゆへいかなとなれば、衆生の貪・瞋・癡の心のかしこきこと、大覺世尊の大善にかしこきがごとし。譬へば犬は鼻のかしこき事人にすぎたり。又鼻の禽獸をかくことは、大聖の鼻通にもをとらず。ふくろうがみゝのかしこき、とびの眼のかしこき、すゞめの舌のかるき、りうの身のかしこき、皆かしこき人にもすぐれて候。そのやうに末代濁世の心の貪欲・瞋恚・愚癡のかしこきは、いかなる賢人聖人も治めがたき事なり。其の故は貪欲をば仏不淨觀の薬をもて治し、瞋恚をば慈悲觀をもて治し、愚癡をば十二因縁觀をもてこそ治し給ふに、いまは此の法門をとひて、人ををとして貪欲・瞋恚・愚癡をますなり。譬へば火をば水をもってけす、悪をば善をもって打つ。しかるにかへりて水より出でぬる火をば、水をかくればあぶらになりて、いよいよ大火となるなり。

今末代悪世に世間の悪より出世の法門につきて大悪出生せり。これをばしらずして、今の人々善根をすゞれば、いよいよ代のほろぶる事出来せり。今の代の天台真言等の諸宗の僧等をやしなうは、外は善根とこそ見ゆれども、内は十悪五逆にもすぎたる大悪なり。しかれば代のをさまらん事は、大覺世尊の智慧のごとくなる智人世に有りて、仙予国王のごとくなる賢王とよりあひて、一向に善根をとゞめ、大悪をもて八宗の智人とをもつものを、或はせめ、或はながし、或はせをとゞめ、或は頭をはねてこそ代はすこしをさまるべきにて候へ。

法華經の第一の巻の「諸法実相乃至唯仏ないしと仏ないのうくじん乃能究尽」ととかれて候はこれなり。本末くきょう究竟くきょうと申すは、本とは悪のね善の根根、末と申すは悪のをわり善の終はりぞかし。善悪の根本枝葉をさとり極めたるを仏とは申すなり。天台云はく「夫一心それに十法界を具す」等云云。章安云はく「仏尚此を大事と為す、何ぞ解し易きことを得べけんや」と。妙楽云はく「乃すなわち是終窮究竟しゅうくくきょうの極説なり」等云云。法華經に云はく「皆実相と相ひ違背せず」等云云。天台これ之を承けて云はく「一切世間の治生産業は皆実相と相ひ違背せず」等云云。智者とは世間の法より外に仏法を行なはず、世間の治世の法を能く能く心へて候を智者とは申すなり。殷いんの代の濁りて民のわづらいしを、太公望たいこうぼう出世ちゆうくびして殷の紂ちゆうが頸を切りて民のなげきをやめ、二世王にせおうが民の口ににがかりし、張良ちやうりやう出でて代ををさめ民の口をあまくせし、此等は仏法已前なれども、教主釈尊の御使ひとして民をたすけしなり。外經の人々はしらざりしかども、彼等の人々の智慧は、内心には仏法の智慧をさしはさみたりしなり。

今の代には正嘉慧星の大地震、文永の大せひせひの時、智慧かしくき国主あらましかば、日蓮をば用ひつべかりしなり。それこそなからめ、文永九年のどしうち同士打、十一年の蒙古のせめの時は、周の文王の太公望をむかへしがごとく、殷の高丁王の傅悦ふえつを七里より請ぜしがごとくすべかりしぞかし。日月は生き盲の者には財たからにあらず、賢人をば愚王のにくむとはこれなり。しげきゆへにしるさず。法華經の御心と申すはこれてひの事にて候。外のこととをぼすべからず。大悪は大善の来たるべき瑞相なり。一閻浮提うちみだすならば、閻浮提こつりようるふ内広令流布はよも疑ひ候はじ。

此の大進阿闍梨あじゃりを故六郎入道殿の御墓はかへつかわし候。むかしこの法門を聞いて候人々には、関東の内ならば、我とゆきて其のはかに自我偈墓よみ候はんと存じて候。しかれども当時のありさまは、日蓮かしくへゆくなれば、其の日に一国にきこへ、又かまくらまでもさわぎ候はんか。心ざしある人なりとも、ゆきたらんところの人、人め目ををそれぬべし。いま訪とどぶらい候はねば、聖靈いかにこひしくをはすらんとをもへば、あるやうもありなん。そのほどまづ弟子をつかわして御墓はかに自我偈をよませまいらせしなり。其の由御心へ候へ。恐々謹言。